
空消失の日【前篇】

真尾坂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空消失の日【前篇】

【Nコード】

N1632N

【作者名】

真尾坂

【あらすじ】

末弟がマフィアのボスにされかけましたの番外編で未来編を軸にしております。

ボンゴレ10代目最後の日の事。

（前書き）

色々と設定変更あり、駄文、矛盾なりの酷い出来栄です。
色々となつ造すらします。
色々と申し訳ありません。

世界中のマフィアが戦つか従うかしか道が無い世界。それが、白蘭が台頭した今の世界。

マフィアには白蘭の脅威に怯え、そのプライドを捨てるか戦って地獄の末死を遂げるしか道は残されていない恐ろしい世の中。

そして、エースにルフィ、綱吉の三兄弟はこの戦いに巻き込まれ、綱吉はその短い命をもう少しで終えようとしていた。

「考え直せねえのか？」

「兄さん、道は一つしかないんだよ」

落ち着いた問いの中に隠された藁をもすぐる思いと涙をこらえる感情。彼がやろうとしている事をどうしても止めたい、考え直してほしいという思いが伝わってくる。

だけど現実はそのなにごと無く、もう道は無いと綱吉は優しく諭すように受話器に声をかける。

駄目ツナだと馬鹿にされていたのはつい十年前だけど、成長して色々な経験した自分には現状とやるべき事は全て分かる。例えそれで誰かが悲しむことになるとしても

「もう少ししたらおれ達の場所に決着がつく、ルフィ達も応援に行けると言っていた。もう少し待つ事も出来ないのか？」

「今やらなければいけない事なんだよ」

考え直すよう自分が考え付く方法を考え、食い下がってみるが頑として考え直さない。

小さい頃と大きく変わった弟綱吉、ただ一寸頑固な所は全然変わって無い。駄目ツナと言われ馬鹿にされた10年前とボンゴレ十代目となり、沢山の人に尊敬されるようになった今。

変わってほしい所が変わらないでどうするんだよ。

こんななら駄目ツナと馬鹿にされて10年間変わらなければ良かったのにと勝手な事すら思ってしまう。

「これはどっちにしても世界を救う事に繋がるんだよ。7^3の一角の後継者であるオレだから出来る事なんだよ」

だから分かってよ、兄さんとエースに優しく語りかける。その優しさが逆にエースの心を深く決る。

何で綱吉はこんなに甘いのだろう。どうしてそんな彼がマフィアのボスの血を引いているのだろう。

甘いものが好きだからこうなってしまったのか、甘いものを食べすぎないように厳しく叱れば良かったと関係ないと分かっている。ちよっとした事すら後悔が絶えない。

ボンゴレの伝説をいくつか知り、綱吉の特殊能力で見破った事で初代はとても善良だと分かったがそんなもの自分には関係ない。弟にこんな枷を与えた初代ボンゴレが憎らしくてたまらない。

前世で嫌った海賊王以上に憎くて殺したくて、綱吉の姓を聞きたくもなかった。

「何でお前なんだろうな」

もうそろそろ耐えきれないと電話越しで涙をぬぐう。

兄弟の中で一番普通を愛し、小さな幸せを求めている綱吉が大きな権力を押しつけられ、大勢を守るために殺されようとしている。

昔はこの世界を平穏で優しいと思っていたけど前世の世界よりずっと残酷だ。

何も悪い事をしてない弟が、甘くて仲間思いの弟が、どうしてこんな思いをするなんてあまりにも理不尽すぎる。世界が憎いと思う感情を抑えるのに精いっぱいだ。

「そんな事言わないでよ」

オレはこの運命を感謝してる、オレは幸せなんだよ。と綱吉は幸せ

そうに笑う。

駄目ツナと言われ、友達もない意味の無い一日を過ごしていたあの頃は全ての事にあきらめ、何も学ぼうとしなかった。どうせ駄目だとすぐに逃げ、立ち向かうなんてありえなかった。

ちよつとした不幸を嫌だと感じ、ちよつとした幸せを知らず本当につまらない日々だった。

だけど今は違う。全ての事が無かったら今の自分はいない、今の自分は自分の運命があつたからこそ手に入れた。

そののどこが不運だというのだろう、むしろ自分はついていると思う。

生んで大きくしてくれた母、自分を思ってくれる兄、厳しいけれど育ててくれる家庭教師、そして自分を大きくした数々の困難とそれを何時も支えてくれた仲間達。

何一つ無くて良かったものは無い、全て宝だ。

「だからこそオレは行くんだ。白蘭を許すわけにはいかない、むやみに人を傷つけた事を後悔させる。これがオレの出来る事だから」

「本当に兄貴は大変だ」

成長知って声変りし、凜々しくなった声に似合う言葉。とても立派でもし白蘭じゃなければ成長したなと褒めてやりたい。

どうしておれの弟はどの世界でもどんな奴でも無茶をしたがるのだろうか。

綱吉には一生分からないだろう、兄貴がどれだけ心配しているのか。赤ん坊の時からずっと見守り、守ろうと必死になった幼い頃。苛められ、泣いている綱吉を見ては苛めた奴らを成敗し慰めていた小学校の頃。おかしい家庭教師に裏社会のボスに仕立て上げられそうになった綱吉を守ろうとした中学生の頃。

そして沢山の仲間を見て、やっと安心したあの頃。

口では何回も兄さんには迷惑をかけたねと言われたけどきつとこの気持ちを理解してはいないし、して欲しくもない。これは自分だけ

の秘密の感情。

「兄さん、本当にありがとう」

そう言うのと綱吉は通信機を切り、音は聞こえなくなった。

ありがとうというのなら、無事な姿を見せてくれ。可能性は少なすぎると分かっていても願ってしまうのは馬鹿なのだろうか？

自嘲と共に熱すぎる雨が降ってきた。

嵐はもうすぐ。

世界中のマフィアが戦うか従うかしか道が無い世界。それが、白蘭が台頭した今の世界。

マフィアには白蘭の脅威に怯え、そのプライドを捨てるか戦って地獄の末死を遂げるしか道は残されていない恐ろしい世の中。

ルフィはその争いに巻き込まれ、死ぬ運命を歩もうとしている綱吉を何とかして助けようとしていた。

「何とかイタリアに行けねえのか!？」

「ルフィ……」

今にも掴みかからんばかりの形相と声色。その全てが彼の必死さを物語っている。

彼を諭す事が出来る人なんてきつと一人しかいないし、彼の姿を見たらそんな事する気にもなれない。

彼がどんなに助けたいか、死なせまいと必死になっているのか知っているから。

外ではどこかで爆音が響く。又争いで誰かが傷ついたのだろうか。そう思うと涙が出てくるがそんな温情をかけられるほど現状は甘くない。

何時アジトがその爆音の発生場所になるか、もしかしたらすぐかもしれない。

運ばれてくる負傷者は後を絶えず、一步外に出れば戦いが待っている。少しでもおかしい行動を取ってしまったえばすべてが無駄になってしまう。

考えれば考えるほど現状の悪さを思い知らされ、焦りと絶望ばかりが募る。

「一体どうすりゃ良いんだ!？」

彼には似合わない絶望に近い表情と苦悩に満ちた声。

こんな姿見たくなくて、どうしても目をそらそうとしてしまう自分がとても嫌だと仲間達は思う。

ルフィは変わり者で何時も前向きで楽観的でそれに腹立つ事も少ないし、もう少ししっかりしてほしいとも思った。

だけどその前向きで明るい彼に何度救われた事が、そしてそんな彼だからこそ今の自分がある事も良く分かっていた。

こんなルフィを見たくない、彼には笑っていてほしい。だけどそんな願いをかなえられない無力な自分がとても悔しい。

「おれは綱吉を助けたいんだ!！」

泣くように叫ぶように言い放つルフィ。

我儘なのは分かっている、周りを危険にさらす事は百も承知。けど弟が大切にこの先の未来も一緒にいて欲しくて駄々を捏ねてしまう。

リーダー失格だと言われても良い、我儘だと非難されてもかまわない。皆に嫌われて独りぼっちになってもかまわない。

弟が死ぬなんて絶対に嫌だった。

初めて会ったのは奈々と出あった日の事。お腹が大きいぞ、太つてると笑えば奈々はもうすぐ赤ちゃんが生まれるのよとほほ笑みながら答え、その温かく動くお腹を触らせてくれた。

そのお腹から出てきた猿のような男の子は綱吉と名づけられ、ずっ

と一緒に育ってきた。

優しくて、仲間思いな弟が大好きでずっと一緒の世界を生きたかった。そして、それを今までずっと信じてきたのにどうしてこうなったのか。

その運命に追い込んだ奴をブツ飛ばさないと気が済まない。そしてそんな奴の為に大事な弟を殺されてたまるものか

「オレは7ハ3を担う大空の後継者だから、これはオレの仕事。だから兄さんは関係ない」

お前がやる必要はない、やるならおれがやると名乗り出た時、彼は宥めるかのようにそう言い放った。

流されやすいはずの綱吉はその一点張りで自分の願いを一切聞いてはくれなかった。自分の気持ちなんて何も知らないくせに。

何でも一人で決め、人の話を聞かないなんて自分勝手すぎる。

それに7ハ3なんて知った事ではない、世界創造なんて自分には関係ない。綱吉が大切に自分は兄だから助ける事の何が悪い。

分からず屋だと言いたいなら言えば良い、綱吉が死ぬなんて絶対に嫌だ。

死ぬのはとても寂しくて辛い。それをルフィは知っている。

消えたはずの前世の記憶。だけどそこで培ったものや大きな悲しみは今でも何故か良く知っていた。

大切な人が死んで泣き叫び、絶望にくれたあの時の思いはいまだに消えやしない。そしてそんな思いをもう二度と味わいたく無い。

「オレは幸せだよ。くいが無いってこういう事かな」

そう言っただけで笑いだしたのはいつの頃か。最初はその言葉を信じ、とても嬉しくてたまらなかった。

だけどその言葉は嘘だと今は言いたい。

7ハ3というしがらみに縛られ、争い事が大嫌いなのに戦いに駆り出され、もっと生きていたいだろうに死ぬ世界に放り出される。

まだ仲間と一緒にやりたい事があるだろうに、もっと平和な世界でのんびり生きたいだろうにどうしてこんな思いをしなければならぬのか。

それなのにこのまま死ぬなんて絶対に許せないし、耐えられない。だからこそ綱吉を助けたい。

雲の隙間から太陽が射し、ルフィの体を照らす。

晴れがもうすぐやって来るようだ。

今すぐにイタリアに行かないといけないに行く術が思いつかない。今にも泣きわめきたい衝動に駆られつつも、頼りない頭を働かせる。自分は何もできない、ただ出来るのは仲間を守りブッ飛ばす事だけとは分かっていたし、それを悔やんだ事は一度もなかった。

ただこの時ばかりは悔しくてたまらない。どうして自分は何も出来ない。

その時だった。

「ルフィ、敵が撤退してる!!」

モニターを見ていた仲間の声。そっちに飛んでいくとモニターに映る敵は後退し、消えている。

何故なのか分からない。もしかしたら罠かもしれないけど今がチャンス。

「おれ、イタリアに行ってくる!!」

綱吉を助けられるのは今しかない、ルフィは急いで出口へと走る。

世界中のマフィアが戦うか従うかしか道が無い世界。それが、白蘭が台頭した今の世界。

マフィアには白蘭の脅威に怯え、そのプライドを捨てるか戦って地獄の末死を遂げるしか道は残されていない恐ろしい世の中。

ボンゴレ十代目、沢田綱吉は今死の世界へと歩もうとし、部下達はそれを必死に止めようとしていた。

「安心してよ」

「絶対に畏です！！白蘭はそんな甘い男じゃない！！」

あんな男、見た事が無い。誰も思いつかなかった兵器を使い大きなマフィアをつぶし降伏させ、誰も思いつかない薬品を使い味方の戦死率を大幅に下げること成功させ、最新の通信機器で内部の連絡機能を一気に向上させた。

そしてついには同じ7^3を担うリングを守護するファミリー、ジツリョネロファミリーまで味方につけてしまった。

こんな男にかなわない、勝つなんて無理だと誰もが思った。

100年近く、最強最大を謳ったボンゴレファミリーもミルフィオーレファミリーに降伏すべきではないかと話し合いがもたらされた。

しかし

「オレは最後まで屈しない。死ぬなら可能性をすべて試してから死にたい」

綱吉は絶対に折れなかった。まだ戦うと屈する事を良しとしなかった。

超直感を持つ彼には良く分かっていて、もし7^3を担うボンゴレファミリーがミルフィオーレに屈した時、ファミリー所か世界が崩壊してしまうのを。

それは絶対に許せない、世界の人々を守りたい。

あまりにも理想主義で甘い考えだと人は言うかもしれないけれど譲れない。例え自分の命をささげる結果になっても。

「獄寺君はオレを信じてくれないの？」

「そうでは無いですけど……」

自分と対峙するように見つめる綱吉に獄寺は食い下がるしか出来なかった。

彼の強さは良く知っているつもりだ。そして彼が起こした奇跡を見てきた。何時もなら自分の愚かさを恥じて、地にひれ伏して謝っているだろう。

だけど今回は違った。白蘭はあまりにも不可解且つ強大で恐ろしい存在、綱吉でも勝てるわけは無い。

殺されるだけだ。あれは人間ではないのだ。

そのためにわざわざ会談という罠に自ら入って死ぬなんて辞めて欲しい。

生きていてほしい、例えば世界が滅びようと彼が生きているなら良かった。

「獄寺君、またオレが生きてるなら世界が滅びてもかまわないと思っ
てない？駄目だよ」

優しくも厳しく叱りつける優しさに今にも涙がこぼれそうだった。

10年前、自分を助けてくれた時からずっとついて行こう、彼の為に生きようと決めていた。

それが自分の最高の喜びでそれだけは譲れなかった。

自分を大切に思い、守ってくれた十代目が大切にその為なら何でも出来る。

例えば醜いと言われても彼が生きるなら全てを敵に出来る意思が獄寺には秘められている。

「大丈夫、成功させるよ」

未来が見えているような自信に満ちた眼差し。

それが嘘だと分かっているにも騙されたかった、綱吉の嘘を信じるふりをしたかった、その嘘を信じ続けたかった。

いつものように彼のいる世界が待ち続けていると思っていたかった。どうして自分は大人になってしまったのか、成長し大柄になった自

分の体を初めて憎く感じる。
騙され続けられる子供のままでいたかった。

「駄目なオレだけど、やってみせるよ」

貴方は全然駄目ではありません。貴方と一緒にいた十年間、オレは一度すら貴方を素晴らしいと思わなかった日は無い。

ですから死に行くような行為はやめて欲しい、何としてでも生きて下さい。

そう懇願したいが何度やっても失敗した。もう彼の意志はどう説得しようと動かない。

「じゃあ、行こうか」

「はい、十代目」

車の手配はもう済んでいる。後はミルフィオーレファミリーの本拠地という墓場に向かうだけ。

全てを破壊し、綱吉を連れて逃げたいと思いながらも彼と共に車へ向かう。

無意味な銃を持ち、無意味な護衛として無力さを感じるであろうにも関わらず、それでも彼は何処までもついて行く。

右腕になると決めたあの日から、自分は最後まで彼を守るために生きるのだから。

「すまねえな」

山本、笹川、雲雀にランボ。オレは十代目と共にきつと死ぬけれどそれで死ぬのは本望だ。

一人だけ幸せに死ぬ事を許してくれ、無責任な右腕で悪かった。後は頼む、信頼してるからな。

今まで悪態ばかり付いていた仲間の中に詫び、後を託しつつ車に乗り込む。

嵐がやむのか吹き荒れるのかは誰にも分からない。

（後書き）

本当にダメすぎますね。人として恥ずかしい限りです。

多忙及びこつちを執筆してて本編の更新が遅れたのですがこんな出来栄で本当にすみません。

もっと頑張ります。

そして続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1632n/>

空消失の日【前篇】

2010年10月28日05時20分発行